
リンド・L・テイラー～正しき勝利者～

Sの追記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンド・L・テイラー〈正しき勝利者〉

【Nコード】

N3340L

【作者名】

Sの追記

【あらすじ】

2003年12月5日ー

リンドⅡLⅡテイラーという死刑囚が死亡する…

その2日前に“L”は、ある刑務所にかかけ合っていた。

そこに集められていたのは、イニシャル「L」のつく青年たち…

(前書き)

2003年12月5日

キラとLの対決の舞台裏みたいなものを書いてみたかった。

こんな、やり取りが、あったらいいな…という妄想w

※「L」が、初期と次期の2タイプ共同だったら…という妄想も入ってます。

初期Lは、“正義”にこだわる熱血漢。
割と男口調な時は、彼。

次期Lは、正義より“勝利”。

飄々としていて時に、冷たくもあり、意外な所で温かい…というw

原作のLは、二人の融合体みたいなエキセントリックな人です。

2003年12月3日
イギリス某所：

「そんな実験のような事、いかに囚人といえど許可する訳には行きません。大体、我が国では“死刑”を行いません。」

強い口調で白いパソコンの画面に向かって声を荒げた女性は、相手の返答を待った。

「だから、“日本”に身柄を移し、日本司法の管理下で行うのです。ミズ、ダイアログ。あそこはまだ、“死刑”を行っている国ですから：」

無機質な画面から、無表情の機械音声が返される。

「全く：、一体何を考えているの？ あなたは：。どうしてもと言うなら、他の刑務所を当りなさい。」

女性ながらに刑務所の最高責任者を務める気丈な彼女も、流石に声が震えた。

それが“恐怖”によるものなのか、あるいは“怒り”からなのか、彼女は自分自身の感情を決めかねる。

世界を震撼させている「犯罪者の大量殺人事件」、その原因と思われる“キラ”。

“人ならざるものの裁き”だとさえ言われる正体不明の“殺人犯”。

議論と尻込みでお手上げ状態のICPOは、目の前で受刑者が卒倒するのを見せられても、未だ、その殺害方法すら解明できていない。

それに対し、全世界トップシークレットの間で名を馳せる“名探偵「L」”は、斬新かつ、単純明解な捜査方法を試そうとしていた。

そして、今、彼女が話している相手が、その「L」なのである。

猟奇的な犯罪にしか興味を示さないという、一風変わった名探偵。

「白いパソコンのイニシャルL」。

彼女と「L」は、彼女がこの仕事に就いた時からの知り合いであった。

勿論、実際に顔を合わせたことなどない。

連絡も、いつも「L」からの一方的な手段で行われる。

そんな「L」に、彼女は少なからず厚意的な待遇をしてきた。

しかし、今回の“捜査協力の依頼”については、首を縦に振る気にはなれなかった。

「L」は時々、こういう“無茶な依頼”をしてくる事がある。

そんな時は、決まって淡々とした無機質な会話の仕方をする。

まさに、今がそうであった。

一連の犯罪者の死亡地域とその動向を分析していた“L”は、アジア最東の小さな島国「日本」に犯人の潜伏場所を絞る。

そこに“囃”を投げて、食いつく犯人の潜伏区域を特定し、その殺害方法までを暴こうというのだ。

“囃”とは、犯人である“キラ”の知りえない「犯罪者」であり、それは“キラ”にとって「受刑者」の事であるらしかった。

「だとしたら、なぜココの囚人たちを対象にするのです？ 司法取引に食いつきそうな輩なら、他に大勢いるでしょう…」

ため息混じりに立ち上がると、彼女は白い壁面いっばいに並ぶ無数のモニターを眺める。

パノプティコン・サナトリウム―

冬でも緑豊かなモミの並木に囲まれた白い円形の建造物は、精神病院としての体裁を持っていたが、実際は特殊な受刑者たちの収容所になっている。

所長であるサリバンⅡダイアログは、壮年の女性であった。

国家機密という程ではないにしろ、言わば大学がらみの研究者たちが実験目的で立てたこの刑務所は、全室展望型の“檻”の無い刑務所である。

そして、服役する受刑者たちも、ある特逸な基準によって集められた法違反者たちであった。

しばらく黙った白い画面は、承諾を得られない状況を好転させるべく、アプローチの方法を切り替える。

「ここの囚人でなければならぬ理由の一つは、ここに服役する受刑者が、暴力事件などに関与していない有識的な法違反者だからです。」

無機質な音声が少し熱を帯びた。

「小さな国のある一部の地域——といっても、公衆の前で、得たいの知れない殺人犯に意見をする。さらに、五分五分の不確実な司法取引に自分の命を賭けるのです。そんな事が、生半可な受刑者に出来ると思いますか？ 例え助かったとしても、顔と実名が出れば、キラではない“暗殺を企てる者”がいるかもしれません。最も、今それを実行する勇気のある“犯罪者”はいないかもしれませんが……」

彼が依頼した内容とは、ここに服役する受刑者の中から『L』として、全世界に顔と名前を晒し、囚としてキラに“殺害”される者を選ぶ許可を求めるものだった。

「それにこの“ 囚捜査” は、犯意を誘発させたとしても、無意味、無効なものではありません。」

「殺害されると解かっけていて、人間を“ エサ” として、殺人犯に殺人をする機会を提供することに、そんな意味があるというの?!」

そんな事、許せるはずが無い…

「麻薬の捜査とは違うのよ? あなた、人間の命をなんだと
思っているの?」

「それは私に言うべき言葉ではありません…」

叱るようなダイアログの言葉に、Lは少し声色を落とす。

「では、このまま受刑者達が、なんの更生も与えられないまま、死亡していく現状を指をくわえて見ていると言うのですか? この私に?」

「あなたが今、犠牲にしようとしているのも、更生が与えられるべき“ 人間” ではないの?」

Lにとって、ダイアログの反応は予想の範囲だった。

Lは静かに言う。

「“犠牲”とは、大多数を生かす為に払う、少数のことであるはず……」

この一人の「囧」という“犠牲”で、多くの「人間」が救える可能性は確かにある。

お互いの主張の矛盾に耐え切れず、ダイアログは黙った。

元より矛盾を承知してるLは、そのまま主張を押す。

「この受刑者でなければならない第二の理由は、キラの目的が、本当に“悪”を裁く事なのだとしたら、この受刑者には手を出さないはず、だからです。もし、本当に人智を超えた能力によって殺す人間を見極めているのだとしたら……、尚更に……」

ここにいる受刑者は、暴力事件などには全く関与していない、少し特殊な囚人であり、自分の利害によって法を犯したものではない。

ある理由によって、不覚にも法に触れてしまった、あるいは、法に触れる覚悟を持ってして、やるべき事を成したもののたちである。

この場合の檻や壁は、世界から彼らを「守る」為にある。

Lは言葉を続けた。

「私は既に、自分で得た分析結果から、犯人の潜伏地域をある程度予測はしています。勿論、それによって犯人像もおのずと見える

： しかし、強行な“捜査と逮捕”に踏み切る前に、“罪無き者”を殺害したという、正等な「罪状」が欲しい。これは、キラが救世主などではない、ただの“犯罪者”である事を、自他共に確認させる大事な要件です。」

彼の言う自他とは、救世主気取りのキラと、それを崇拝する人々の事である。

「無論、罪を犯したものには、無条件に死刑を先刻するという法律がある国であれば、ここの受刑者であっても何の意味もなさないでしょう。しかし、先におっしゃられた通り、あなたの国は受刑者に対して“死刑”施行しません。だからこそ、キラ逮捕へ協力する理由がある。それに例え、その結果が“死刑”になってしまったとしても、国際的な凶悪犯罪に対し“犠牲”を払ったという事になる…。」

犯罪者を殺害したという公的事実では、全てのものが首を揃えて「キラ」を“悪”とは認めないだろう。

ましてや、犯罪者の処理に困っている死刑廃止国や、死刑施行国にとっては、「キラ」はある意味、本当の救世主なのだ。

犯罪を犯したのにも関わらず、様々な事情で長い刑期に服する囚人たちの中には、一般の貧困層より快適な暮らしを、人々の税金で送っている者もいる。

少なからず、今、報道されている犠牲者は、一般人から見れば、そんな憎むべき“犯罪者”たちなのである。

「私だって、人間の命を粗末に考えている訳ではない。しかし、

今現状で何か出来るとすれば、この“囀捜査”で、キラを犯罪者として追う姿勢を国家レベルで整えなくては…」

政治事件の依頼を拒んできた「L」らしからぬ発言だった。

「国家レベルでの捜査の先導を、あなたが執るといふの？」

「いえ、それは私の望むところではない。しかし、今、有権国家がキラを“黙認”するような事になれば、確実に第四次世界大戦が起きます。幼稚な“正義”を気取る殺人者の取り合いで…」

Lに言わせれば、20世紀の世界情勢自体が「第三次世界“冷”戦」である。

そんな話をした記憶を辿りながら、サリバンはLの言わんとしている事を考えた。

Lは、各有力国家にキラを“犯罪者”として追う姿勢をとらせたいらしい。

キラを容認するような国家があらわれ、それにキラが乗ったとしたら…

キラがどんな人物かは分からないにしろ、世界中の犯罪者に手を出しているということは、少なからず自分の私利私欲を満たす事が目的ではないはずだ。

キラは“世界”を望んでいる…。

しかも、一人で…

キラを複数のグループと考えるものもいたが、Lは直感で、キラを“単独”と判断した。

今はまだ：

「私は一刻も早く、奴に“自分は追われる立場”だと言う事を理解させたい。義勇兵気取りの奴が、本当に義勇兵を組織する前に：。」

そして、どこかの有力国家がそこに組み込まれる前に：

「キラはおそらく、今の腐った世界体制よりも、自分が決めたシンブルなルールの方が“正しい”と思っている。自分が正しいという“自信”こそが奴の原動力。脅威的な能力を持っているが、結局は、奴も自己陶醉型の過激な“思想犯”です。あんなやり方は、決して“正義”などではない：。」

さっきの捜査方法を説明する淡々とした口調とは打って代わり、見えない画面の向こうで、熱心に捜査の必要性を語る「L」の声を聞きながら、ダイアログは静かに話を聞いていた。

いつもの彼だ：

要点だけを淡々と指示する時の“彼”は、時々本当に血の通った人間なのかと思うほどに、ダイアログをゾッとさせる。

しかし、少し口が悪くなる時、熱っぽい心情を語る時、そんな時の“彼”は、まるで孤高の夢を追う息子のように、彼女は好意を持っていた。

早くに息子を亡くした彼女にとって、若い頑なさは無条件に愛おしい。

時々振られる無茶な要望にも、極力応えてあげたいと思うのは、そんな頑なな息子に対する母の感情に近いものがあるからだ。

「—ですから、ミズ、ダイアログ。今の私には、あなたの協力が必要なのです。大体、こんな事、他の誰に頼むことが出来ますか？ 自分の利己主義の塊のような一般の犯罪者、そんな彼らを監修する意義薄弱な“刑務官”ですら、この“囚”は務まらないでしょう。」

「それは言い過ぎね、L。」

苦笑交じりに、憶測的暴言を諫めると、ダイアログは視線を白いパソコンの画面へと戻す。

真っ黒に汚れた法律の仕事の中で、はじめて会ったあの時と同じ、真っ白な画面。

やはり、さっきの震えは、“怒り”の方であったのかと、彼女は納得した。

芯の強すぎる困った子…

ダイアログは腹を決める。

「どうすればいいか、詳しく聞かせてちょうだい…」

壁のスイッチを押すとブラインドが少し上向き、冬の暖かな日差しが、その白い部屋を一層、白く光らせた。

Lの要望に、受刑者のリストから該当者を選んだダイアログは、彼らの部屋をモニターに移す。

「L、あなたの項目に当てはまる者は、ここにいるもので全員よ。」

数人の若い男を、Lは観察した。

「もう少し、それぞれについての詳しい資料を送って頂けないでしょうか？」

「協力するとは言っても、立場上の守秘義務は最大限守りたいの。第一、あなたは勝手にここの記録を閲覧しているものと思っただけど？」

少し意地悪な口調で返答したダイアログに、Lは少し黙った。

「……………以後、許可なしに閲覧はしません。」

以外にも、しおらしい返事が返ってきたので、ダイアログは笑わなように唇を噛みしめる。

「分かりました、今日だけ特別に許可します。しかし、情報の持ち出しは一切禁止。あくまで閲覧のみの許可です。いいわね？」

管理室に合図を送ったダイアログは、データ閲覧の暗証番号を打つ。

「助かります…。では、少し時間を…。」

会話の回線が遮断され、変わりにデータベースにハッキングがかかる。

ものの数秒でハッキングも解除され、再び会話の回線が繋がった。

「彼に決めました。」

ダイアログは、Lの指した青年の資料に目を落とす。

リンド・L・テイラー

私はこの青年を“犠牲”にするのだ…

ある青年の“希望”に応える為に…

ダイアログは小さくため息をついた。



白い白い壁の中に、数人の若い男達が集められる。

白い木綿の上下を着た男達は、世間で言う“犯罪者”たちであった。四方を白い壁に囲まれ、柔らかな照明が、その上下左右から当てられている。

影の無い部屋だった。

唯一黒いものは、壁の上部に備え付けられた監視カメラである。

この建物には、多くの監視カメラが設置されているが、実験体に対して死角の無いような設置の仕方がされているのは、この部屋のみである。

「サリバンらしくないね…」

若い男の一人が、静かに立っている男達に言った。

私語は制限されていない。

ドアの向こうには誘導してきた看守がいるが、部屋には彼らだけだった。

押し黙る男たちを見回し、肩をすくめた若い男に、黒い髪の男が答える。

「何か事情があるんだろう…、説明をしている時間が無い程、切迫しているのかもしれない。」

外の看守には聞こえないだろうが、監視カメラの先にいる人物には聞こえているだろう。

彼は、当たり障りの無い言葉を選んでいるようだった。

視線を監視カメラへ向ける。

視線を追った若い男は、フツと軽く笑った。

「じゃあ、横暴な上からの“理不尽な要望”だろうね。」

彼は、あえてそんな言葉を選んだようだった。

「状況がわかるまで、余計な詮索はしない事だ。内容が分かった所で、俺達にどうこう出来る権限は無い。ただし、依頼主は、自分の存在を隠し、人を監視部屋に呼ぶよう、サリバンに強要するよ。うな奴である事は、確かだが…」

壁にもたれていた一番年長の男が、口を開く。

部屋に居る男たちは、一斉に監視カメラを見た。

権限を持つルール違反者を、権限を持たないルール違反者たちが見上げていた。

自分の存在を隠し、姿を見せない依頼主は、監視カメラの向こうで、同年代の視線を静かに見つめる。

そして、その視線の中から、目当ての青年を見い出す。

「彼に“依頼”します。直接話すことは出来ますか？」

“依頼”――

年長者の男の言葉を、彼は借りた。

現状の社会的立場は上だが、力を借りるという立場では、“命令”ではない。

“平等”^{フェア}であるはずの敬意を払うべきだ……と。

男達からの提案を呑んだ彼は、沈痛な面持ちのサリバンに、その部屋へ自分の回線をつなぐように指示する。

白い部屋に通信が繋がり、機械の音声が男たちに言う。

「みなさん、お察しの通り、事態は急を要します。詳しい話を話す事は出来ませんが、私の“依頼”を受けて下さるなら、今、世界が足を踏み入れようとしている危機から、少なくとも一歩遠ざかる事ができるでしょう。」

「“キラ”に関係している事だろう？ お前は“L”か？」

年長の男は、カメラの前へ歩いた。

「……良い考察力ですが、詳しい事はいえません。私が依頼したのは、リンド・L・テイラー、あなたです。」

名前を呼ばれたのは、年長の男ではなく、最初に口を開いた若い男でもなく、押し黙る一同の中にいる黒髪の男であった。

「こんなやり方、納得できない！！」

怒ったのは、年長の男だった。

「残念ながら、今回の拒否権は“あなた”にはありません。」

状況を把握できない男たちと、“拒否権”を持つ黒髪の青年は、年長者と機械音声のやり取りを聞いている。

「なぜ、俺じゃダメなんだ？！ 年齢は関係ないんだろう？ ここにいる奴らもいくつかバラつきがある。必要なのは“名前”…、違うか？」

「ドクター・ラーンビンス。あなたは若くして、優秀な精神分析医です。今回の“キラ”の動向から、ある程度、私のやろうとし

ている事を察したのですか？」

「ここにいる奴らは、名前に“L”というイニシャルが付く。おそらくアンタの“身代わり”だろう？」

一同が、ざわつく。

「身代わり」?! なんだ? ということだ?!」

一番最初に口を開いた若い男が叫ぶ。

「今、世界を騒がせている大量殺人犯のキラ。おそらく、奴の特
殊なカラクリを説明する為に、お前は“囹”を使うつもりなんだ。」

男たちの問いかけには答えず、ラインビンスは監視カメラを睥んだ。

「“大勢”で問答をしているヒマは無いんですよ…」

Lは、熱の無い機会音声で告げる。

リンドは、静かに次の言葉を待った。



策戦のあらましを聞いた一同は、黙った。

もし、それを聞いた上で、自分達の中から一人を選べと言うなら、もう少し慌てただろう。

しかし、依頼主は既にその中から一人を選んでいる。

リンドは、周りの男たちが視線を伏せる中、じっと見つめているラインビンスを見た。

同じ“L”のつく男。

リンド自体は、ココに収容されている間、世間一般の報道の事ではか“キラ”を知らない。

それよりも、彼には心に決めている“やるべき事”があった。

こんな所で死ぬわけにはいかない…

それも、いちかばちかの罠になるなんて…

L自身は、必ず彼でなければならぬとは考えていない。

交渉が決裂すれば、次に次に候補を下げていく。

最終的には、その中で決定しなければならないが、おそらく最初で決まると読んでいた。

彼は引き受ける…

彼が断れば、候補をこの中から選ぶという事も、Lは一同に伝えて
いる。

個人的に承諾を得る事も可能だろうが、“一刻を争う現状”が、L
にそのやり方を選ばせた。

この場合、周りがいる事で、交渉の確率は上がり、決断の時間は早
まる。

そういう人物である…

Lはリンドの経歴の資料とさっきの観察から、そう結論していた。

リンドは、もう一度、みんなを見回す。

俺が断れば、誰かが代わりになる…、そして、おそらく…

リンドはラインビンスを見た。

ラインビンスは、監視カメラを睨んでいた。

「噂通り、汚い奴だな…」

若い精神分析医が、世紀の名探偵に言う。

「正義が、キレイであるとは限りません。」

何を思い、Lはそれを口にしたのか…

リンドはカメラを見つめる。

無機質なカメラの向こうで、自分の答えを待っている正義の探偵…

「わかった…」

「おい！！ お前…」

うなづいたリンドに掴みかかったのは、最初に口を開いた若い男だった。

振り返るラインビンスは、深い溜息をつく。

「こんな事あるかよ！！ こんなライオンの巣にぶち込まれるウサギみたいなの… だったら、俺にだって出来る！ 俺はリックだ！
リックⅡヒューマン！！ スペルは、L、I、C…」

リンドは、肩を掴む男に、首を振った。

「俺が頼まれたんだ…」

ラインビンスは、再び監視カメラを見上げた。

「この司法取引…、受刑者側には何のメリットも無い。…いや、こんな取引でも、依頼でもない。ただの公開処刑だ…」

リンドを含め、その場の一同が目を伏せる。

「第一、この策戦は、囚が犠牲になって初めて成功と言える…。本来ならば、同時刻、死刑になる囚人にさせるべきだ。」

「その通りです。」

「…だが、死刑になるような人間、しかも延命の可能性というエサに食いつくような人間に、果たして“L”を演じきれるのか…」

報道者に囲まれ、いつどこから訪れるかも分からない“死”を待ちながら、「正義」を演じる…

「そして、本当にキラによって“犠牲”が払われた場合、“死刑囚”を囚に使ったという“いい訳”によって、お前の「正義」という立場は、揺るがない。」

「……………」

「何の罪も無い人間を、自分のフリをさせて“囚”にするなんて、許されない捜査方法だ…。公にはな…」

だから、お前は、俺たちを使う…

そう、ラーンビンスは続けなかった。

使われるのは、自分ではないのだ。

ただ彼は、状況が飲み込めていない周囲に、Lがいかなる手段を使おうとしているかを伝えたかった。

「もし、この方法で、キラが挑発に乗ってこなかったら、リンドはどうなる？　あるいは、その超能力で、本人ではないと分かったら…」

ラインビンスの推論を静かに聞いていたLは、後半の質問にだけ答える。

「もし、キラが乗ってこないなら…」

99.9%、その可能性は有りませんが、もちろん、彼がLでは無い事を報道し、今後、その身柄は、私が責任を持って保護しよう。

もし“キラ”が世間で言われるような『神』のような能力で、悪人の裁きをしているというのなら…

神の思う“悪”の基準が、多少は解明されます。

あるいは、その神を“囹”を使って、試そうとした“本物の私”が…、」

少しの間―

「罰を受けて“死ぬ”…かもしれません。」

罰…

もとより承知の上か…

世界の「正義」：

その立場が、どれだけのモノを背負うのか、ラインビンスには追想しきれなかった。

だが、その「正義」を他者にまで望むのは、間違っている：

ラインビンスはカメラを見つめた。

「俺達、思想犯罪者は、意識を変えられない。しかし、国としてはその“技術”が欲しい。あるいは“育成”の価値がある法逸脱者として、ここに収容している。緩慢な監視の元、行動、言動の自由を与え、少しづつ利用出来る人間に飼いならしてく。この案を出したのもお前らしいな、L。」

「飼いならされる…？　そう感じるのは、あなた個人の価値観だ、ドクター。」

カメラの向こうの口調が少し熱を帯びたようだった。

「今、私が最優先したい事は、いかに“キラ”自身に対し、自分が神などではないという“自己意識”を持たせるか…。これは時間が経てば経つほど、厄介な事になる。事は一刻を争う。個人的な恨み事の誤解を解いている暇は無い。」

Lは2本の回線のうち、1本を遮断した。

「あなたほどの考察力があれば、分かるはず…」

「じゃあ、なぜ、俺ではダメなんだ?! 　なぜ、お前が選ぶ?!」

この質問には、L自身、答えにつまった。

なぜ、彼なのか?

答えを待つ、黒髪の青年をLはカメラ越しに眺める。

「…らしさ”ですよ。」

切ったハズの回線が繋がり、カメラの探偵が答えた。

「…らしさ”?」

予想もしない回答に、ラインビンスはリンドを見る。

謎の名探偵“らしさ”を備えた青年は、深いブルーの目をしばたいた。

「今“キラ”に対して、一番プレッシャーをかけられる方法は、コレしかないのです。」

リンドは、カメラを見つめる。

「私は“キラ”に勝ちたい。間違ったものが勝利を得ることは、我慢がならない…」

奇抜な理屈をこねる名探偵は、今、一つの信念を語った：

許せないもの…

リンドは胸の奥が疼くを感じる。

そうだ…

許してはならない、勝利者…

リンドの意思は固まった。

「私が“囧”になれば、あなたはキラに“勝つ”ことが出来るのか？」

しばらくの沈黙。

「……………必ず…」

彼なら、勝ってくれるかも知れない…

わたしの憎むべき“勝利者”たち…

勝利者を負かすには、それに“勝つ”しか、無いのだから…

リンドは、指示に従い部屋を出る。

交渉を聞いていたサリバンは、緊張させていた肩を降ろす。

「決まったからには、策戦の成功を祈るわ。」

「彼の遺書の内容は、私が責任をもって対処します。」

再び無機質に戻った声に、サリバンは続けた。

「ラーンビンスの言った事は本当なの？　こここの創設者はあなた？」

白い画面を見つめるサリバンは、答えを待った。

「パノプティコン自体の構想を考えたのは、私ではありません。
…ですが…」

部屋へ戻っていく青年達を見ながら、サリバンはLの言葉を聞いていた。

何らかの事情によって、居場所を追われる事になった法違反者を“研究”という名目の元、匿う”という案は彼の出したものだと言う。

その場所では“間違い”であっても、別な場所では“正しい”という事がある…

「自分が“正しい””と思ってしたことが、必ずしも全ての人にとって、そうである訳ではないのですから…」

それは質問の答えではなかったが、サリバンは満足した。

だから、こそ…

何が“正しい事”であるのか、問い詰める「正義」が必要なのだ…と。

『正しい者たちに、“勝利”を…。』

リンド・L・テイラー

2003年12月5日 死亡

Lは、キラの殺害方法の一例データと共に、潜伏場所を日本の関東と断定

FBI1000人の調査団を、未明、日本へと派遣する…（報道記事より）

(後書き)

あとがき

…という程でもないのですが…

リンドと初期Lを書いていたつもりが、いつの間にか色々キャラが出てしまいました…

ラインビンスは、P e t e r ∥ L e a r n b i n c e (ピーター ∥ ラインビンス)

精神分析医という良く分からない肩書きを持っています(笑)

リンドを止めようとした青年は、L i c k ∥ H u m a n (リック ∥ ヒューマン)

Lが付きますw

そして、L i n d ∥ L ∥ T a i l o r (リンド ∥ エル ∥ テイラー)

すげ、3つもLがある…

勿論、リンドは本名ですよ？

デスノート効いたしね？

妄想では、テイラー氏は、ニアの過去にも関わってくる重要な方。

けて真っ当な手段ではないけれど、“1つの正義”の為に、散った人。

彼もまた、掲げる“正義”や、目指す“勝利”があったのでは？

デスノの世界は、色々な形の“思い”が混在していて、楽しいですが…
書いているうちに、何が言いたかったのか分からなくなっちまいました…

でも、まあ、なんとなく、初期とエルとリンドの空気感が書ければ満足なのさv

雰囲気を読んでください。

そして、こんな所まで、読んで下さってありがとうございました★

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340/>

リンド・L・テイラー～正しき勝利者～

2010年10月22日00時41分発行